

# ユル・ブリンナーと日本の親戚

樫本真奈美

ユル・ブリンナー（一九二〇～一九八五）はミュージカル『王様と私』映画『荒野の七人』でよく知られる世界的な大スターだった。親日家だったユルはかつて何度も来日し、映画の撮影や宣伝のみならず、日本の映画雑誌やテレビコマーシャルにも登場しお茶の間を沸かせた。黒柳徹子さんは著書『トットのマイフレンド』（新潮社、一九九〇年）でニューヨーク留学時代にユルと知り合っただけで以来親交を温めてきたことを記していて、ユルは「徹子の部屋」に出演したこともある。

これまでユル・ブリンナーが日本人の血をひいているのではないか、という噂が絶えることがなかったようだが、これは間違いである。ユルはロシアのウラジオストクに生まれたロシア人だった。幼い頃にハルビン、青年期にフランス、その後ニューヨークに腰を落ち着けアメリカ人俳優として成功を収めた。

あるものの、週刊誌ならではの憶測も書かれているため、好奇心が誤解を呼ぶかたちになったのだろう。

しかし何より、誤解の元凶はユル自身でもあった。アメリカでスターの座に上りつめてからも、ユル・ブリンナーはその出自を曖昧な言動で煙に巻き続け、「母はジプシー」「日本の樺太生まれ」などどうそぶいたからだ。それは日本のインタビューでもそうだった。米ソ冷戦の最中であって「ロシア人」という出自を強調したくなかったともいわれるが、ロシア革命直後のウラジオストクは、正確に言えば、ユルが生まれた一九二〇年から二年間だけ極東ロシアに存在した「極東共和国」だった。これは、日本を含む第一次世界大戦の連合国が共産主義を打倒する名目で軍事干渉を行った（シベリア出兵）時に、その干渉軍に対峙する名目でソヴェエト政権によって建国された短命の緩衝国だった。要するに、こうした特殊な事情を日米のゴシップ記者に丁寧の説明する根気がなかったようだ。ユルが来日するたびに、本人の「リップサービス」と憶測をもとに「出生の秘密」

と題して週刊誌が度々取り上げた。東洋的な外見を持つ大スターに日本人の血が流れているかもしれない、という「期待」もあつてのことだろう。

ユル・ブリンナーの祖父ユリウスはスイス人の実業家で、明治時代に日本にやって来て長崎横浜に約一〇年暮らした。アメリカ人が経営する貿易会社「ウォルシュ・アンド・ホール商会」に勤めるうちに海運業に注目し、ウラジオストクに拠点を移して「ブリナー商会」を創業、鉱山業や木材事業にも着手して極東ロシアの開発と発展に貢献した人物である。

ユルはユリウスがロシアに渡ってから結婚したロシア人との孫にあたる。ユリウスの妻、つまりユルの祖母がブリヤート系ロシア人だったことでどこかアジア的な外見がユルに受け継がれたのかもしれない。

しかし、ユルが生涯大切に信じた「日本人の従兄弟」がいたことは事実である。つまり、ユリウスという同じ祖父を持つ従兄弟で、江藤直輔（えとうなおすけ）さんだ。拙訳『ロシアからブロードウェイへ オスカー俳優ユル・ブ

リンナー家の旅路』（群像社）のあとがきで少し触れたが、詳細を記すことができなかつたためこの場を借りてユル・ブリンナーの日本の親戚について、江藤家の子孫に直接伺ったお話しも含めて記したいと思う。尚、「ブリンナー」という姓はユルがアメリカに渡ってからNを足して名乗った姓で、祖父の姓はブリナーである。

一八七〇年代、ユリウス・ブリナーは長崎に來日し、外国人居留地のグラバー園がある場所に暮らしていた。その時に江戸幕府で御船奉行を務めた土族、富田吉左衛門の一家の娘と恋に落ちた。残念ながら名前は不明である。ユリウスと富田家の女性との間にふたりの娘が生まれた。そのうちのひとり照代（てるよ）さんが二一歳の時、広告会社「弘報堂」（現在の株式会社日本広告社）の創業二代目である江藤甚三郎に嫁いだ。弘報堂は福沢諭吉の意向でつくられた日本最初の広告会社である。福沢が創刊した日刊新聞「時事新報」に勤務していた弟子の江藤直純が師匠の意を受けて創業した。つまり、江藤直純の息子が甚三郎、孫が直輔となる。

大分県中津出身の江藤家の軌跡を記した『江藤二翁傳』（昭和二三年）によると、照代さんは吉右衛門の養子となった富田卓爾の実子と



高輪にあった江藤家の庭で撮影 上段の中央が直輔氏、下段の向かって右から二番目が照代さん、四番目が甚三郎氏

記されている。このあたりの経緯は明らかではないが、ユリウスがロシアのウラジオストクに去った後、妻の実家の富田家で戸籍上の配慮がなされたのだろう。

直輔さんの末娘で、照代さんの孫にあたる美那さん（八〇歳、東京在住）によると、「祖母の照代はいわゆる合いの子だったので横浜サンモール学院に通ったのよ」（現在は「サンモール・インターナショナルスクール」と教えてくださった）。

ちなみに、ユリウスは突然日本の家族を捨て去ったわけではない。ウラジオストクに拠点を移してから何度か日本と極東ロシアを行き来して日本の家族を気遣っていたことがブリナー家の親族の証言からも明らかになっている。当時はまだ未開地で文化も風習も違うウラジオストクに日本の娘たちを連れて行くのをためらったこと、ユリウスが日本の家族のことをロシアの家族によく話して聞かせたことも伝わっている。



エドワードと初めて会った時の美那さんとお母様

そうしたユリウスの思いもあってか、江藤直輔氏は戦前に中国にわたりブリナー商会の上海事務所を手伝いをしてきた時期もある。戦後は横浜の東海金属の重役となり成功を収めた。

ユル・ブリナーは世界的なスターになつてから仕事やプライベートで何度も来日し、その度に直輔氏と連絡をとっていたようだ。美那さんは子どもの頃は身体が弱かったそうで、ユルが家に来るといつも心配してお土産をくれたりお見舞いの言葉をかけてくれたという。空気が綺麗なスイスで療養を兼ねて進学するといひ、と言つて祖父ユリウスの故郷に近いスイスのローザンヌ（ユルの叔父も学生時代を過ごし、ユル自身も暮らしたことのあるブリナー家馴染みの地）の学校をいつでも紹介すると勧めてくれたりもしたそうだ。

英語が堪能だった直輔氏とユルの交流は生涯続き、ふたりとも酒豪だったというから、さぞかし気も合ったことだろう。直輔氏は東京神田のロシア正教会、ニコライ堂に美那さんを連れてよく行ったそうだ。洗礼を受けたわけでないそうなので、ロシア正教会は直輔氏にとってブリナー家との繋がりを感じる大切な場所だったのかもしれない。

一九八〇年代初頭、ユルが肺ガンを患つたと

知ると、当時日本で末期ガン患者に効果があると話題になった丸山ワクチンを手配するなど、最期まで従兄弟を気遣つたという。ユルは病気を公表してからも『王様と私』の再演を精力的に続け、周囲に弱つた姿を見せたり弱音を吐いたりしなかつたと言われている。日本にいる直輔氏に電話で治療法の相談をしたというのは、よほどの信頼関係が伺える。

また、美那さんはブリナー家のうち、ユリウスの末娘ニーナ（一八九五〜一九七二）の家族と交流を持ち長年文通を続けていたそうだ。ニーナと結婚したオストロウモフはブリナー商会の顧問弁護士を務めた。ニーナ夫妻は三〇年代にソ連を脱出しアメリカに渡つた。ふたりの

長女スヴェトラナがアメリカ人の配偶者エドワードと一緒に仕事で日本に滞在することになり、来日後、外国人を手助けする団体を通じて日本人の親戚を探したことで江藤家に連絡があつたらしい。

直輔氏が逝去される直前にはスヴェトラナが病院に見舞い、床に何度もひざまづきながら懸命にロシア正教式の祈りを捧げてくれたことがとても心に残っているそうだ。

ユル・ブリナーが日本を愛した理由のひとつには、江藤家との確かな繋がりがあつたからこそなのかもしれない。江藤直輔氏は横浜市鶴見区の總持寺に眠っている。



1962年ブリナー来日時 ユルと直輔氏  
下段は左から博子さん（直輔氏の妻）、美那さん、右のふたりは富田家の人